

日本サッカーとＪリーグから学ぶラグビージュニアユースとユース世代の可能性

The clarifying potential of Japan rugby youth age team from Japanese football particularly J-league

1K09B132

津金 崇仁郎

指導教員 主査 太田 章 先生

副査 島田 陽一 先生

【第一章 緒言】

本研究は、1993年にＪリーグが開幕したことにより、競技力向上、競技人口の増加、競技人気、ユース育成環境の整備において急成長を遂げた日本サッカーの取り組みをモデルとして、ラグビーのジュニア・ユース世代の育成環境の改善を検討するものである。

【第二章 Ｊリーグの組織体制と取り組み】

Ｊリーグ誕生前の日本サッカー界は長く低迷していた。Ｊリーグ発足以前の日本サッカーは現在の日本ラグビー同様に日本サッカーリーグという実業団リーグとは異なり企業運動部のみではなく、クラブチームも参加できるトップリーグとして活動していたが、低迷脱却のためにプロリーグ設立を唱えた。常識的な発想としては競技レベルがプロとしてふさわしいものに達してからプロリーグ設立を考えるのであるのだが、日本サッカー協会はプロにふさわしい環境を整えてはじめて競技力が上がるという逆転の発想からＪリーグ発足に至った。

【第三章 日本ラグビー組織体制と取り組み】

ジャパントップリーグが開幕する以前の日本ラグビーは主に各地域リーグとその上位チームで1948年から2002年まで行われた全国社会人ラグビーフットボール大会、日本選手権大会で形成されていた。育成に関しては、日本サッカーと同様に、日本ラグビーにおいても良い選手を育てる為には良い指導者の育成が重要と位置づけ、指導者資格の義務化を則している。そのため、指導者養成事業を行い、その指導者養成事業は3つの柱のもと行われている。また、目標達成に向けて、それぞれ一貫した指導方針に基づいて、年齢やレベルに応じた内容で構成されている。

【第四章 Ｊクラブ下部組織と中学・高校ラグビーとの比較・検証】

それぞれの所属していたチームの選手に【練習環境】

【スタッフ・選手】【心理状況】【各所属チームに所属して良かった点・一貫指導】【比較対象組織との最大の違い】という5つのテーマに沿ってインタビューをした。ここから、メリットとデメリットを比較してどちらが育成年代において理想の環境かを検証した。インタビューの結果はジュニアユースもユースどちらも部活やラグビースクールでの活動よりもメリットが多く、デメリットの少ない結果となった。育成年代に理想とされる育成環境は一貫指導を可能にし、メディカルも含めたスタッフ体制の充実に努めることのできる「Ｊクラブ下部組織」のような組織であると考えられる。

【第五章 Ｊリーグから学ぶ今後の日本ラグビーの方向性】

ラグビーとサッカーの決定的な違いは育成に対する考え方である。サッカーは日本代表の強化のためにはトップの強化と同時に育成が必要だと早い段階で気づいていた。しかし、ラグビーは日本代表の強化のため

にトップの強化ばかりに力を入れていたことがサッカーとの大きな違いである。ラグビートップリーグも下部組織を持つことで、育成強化に必要な一貫指導が可能となるのではと思う。特に現在の日本ラグビーの人口減少の原因として、中学、高校で続ける選手が少なくなったことが挙げられる。ミニラグビーの人口は増加していることから、この子どもたちがその後もラグビーを続けていく環境を作る意味でもトップリーグ下部組織の存在は大きな役割を果たすと考えられる。このように、私は今後の日本ラグビーのトップ強化には育成年代でのチームとしての一貫指導が必要不可欠だと考え、その為に、日本最高峰ラグビーリーグである「トップリーグ」の下部組織を誕生させ、Ｊクラブユース同様ジュニアとユースでの一貫指導を通じて強化していくことを提唱する。

【第六章 まとめ】

- ・日本サッカーはＪリーグ発足以前から育成年代の強化を明確にし、取り組みをしてきた。
- ・Ｊリーグ誕生により、Ｊクラブチームがチームとしての一貫指導を可能にし、育成年代の強化がより進んだ。
- ・日本サッカーは日本代表の強化をしていく上で、トップの強化と同時に育成年代の強化にも力を入れてきた。
- ・今までの日本ラグビーは日本代表の強化をしていく上で、トップの強化だけに固執し、育成に対する取り組みが不十分だった。
- ・日本サッカーの取り組みを参考にした結果、日本最高峰ラグビーリーグである「トップリーグ」の下部組織を誕生させ、Ｊクラブユース同様ジュニアとユースでの一貫指導を通じて強化していくことを提唱する。